

騎馬民族説の復活「扶余族に征服された邪馬臺国」

槌田 鉄男

～ 1. 前書

邪馬臺国論争は混迷を極めていいる。多くの考古学者が主張する近畿説では纏向遺跡は3世紀のものであり、これが邪馬臺国であるとしている。だが本論でも述べるように、この遺跡と魏志倭人伝とを照合すると近畿説は否定的なものになる。そもそも近畿説は南を東と読み替える論理をベースとし、邪馬臺国の時代より千年以上も後世の地図をその拠所としている。しかし、この論理は非常に懐疑的なものであり、この論理が成立しなければ近畿説は途端に根拠をなくしてしまう。本来この論理の確立が最も急がれるべきだが、それを避け、近畿説では卑弥呼がもらった金印や封泥など、決定的な考古学的材料を探す事が主要課題となっている。

何故、多くの考古学者は近畿説に執着するのか。その理由は3つあると考える。一つ目は近畿説が大和朝廷に向かったのストーリー構成が容易なのに対し九州説では困難である事。二つ目は卑弥呼が倭王であり、女王の住む国は列島最大の遺跡でなければならないと言う思い込みである。そのため纏向遺跡が巨大であり、卑弥呼の時代まで遡る可能性が出てきた時、これこそ邪馬臺国だと言う主張が生まれた。そして、三つ目は後漢書倭人伝が狗邪韓国を邪馬臺国の西北としている事である。これだと邪馬臺国は朝鮮半島から見て東南になり近畿になってしまう。後漢書は魏志倭人伝より200年も後の5世紀に書かれたものであり、魏志を参考にしているが魏志にない57年の金印や107年の帥升など信憑性のある伝承が記載されている。しかし、後漢書が書かれた時代、近畿には大和朝廷があり中国でもその事は知られていた。同時代の倭国の政権を女王国だと思うのは当然であり、近畿説には思い込みの長い歴史が存在することになる。

一方、九州には紀元前から卑弥呼の時代まで継続的に続いた遺跡が多数あり、王墓に相応しい遺跡も複数ある。更に魏志倭人伝との一致点も多い。そして纏向遺跡は邪馬臺国の東征の結果出来たとの主張が多い。しかし東征説では纏向を4世紀の遺跡とし、年代が近畿説論者と衝突するだけでなく、考古学的には否定材料が多いとされる。このように論争が収斂する様子は全く見られない。全く別の切り口がなければこの論争の解決は難しいと思われる。

景初3年(238年)の三角縁神獣鏡の存在はヤマト朝廷の誕生が3世紀に端を発すること示している。筆者は考古学の専門家ではなく専門知識も持ち合わせていない。本論は多くの考古学者の主張に従って纏向は3世紀に始まった遺跡であるとし、個々の事象も考古学の主流と思われる学説に則って進めた。そして、それらを総合して一番合理的と思われる筋書きを探すと云うやり方で臨んだ。

最近の研究では、稲作は北部九州でBC10世紀に始まったとされる。そして、近畿まで達するのに400年、関東まで600年かかっている。それに対し纏向型前方後円墳は3世紀の半ばから4世紀初頭の数十年間で、西は鹿児島から東は福島の内陸まで広まっている。人から人へと手渡しで広がる事の出来る土器や銅鐸のような物と違って、新しく生まれた同一規格の構造物である墳墓が日本各地に広がるためには直接人が出向かねばならない。それにもかかわらず非常に短期間で、しかも、それまでの銅鐸などの地域文化圏を遙かに凌ぐ範囲に広がったのだ。そして同じ時期に、各地の銅鐸が消え、環濠集落がなくなっている。

3世紀と言う時代は、明治維新に匹敵するような大きな変化が広い範囲に、しかも急速に進んだ時代であり、弥生時代が数百年かけてゆっくりゆっくり日本各地に広がったのに対し、古墳時代は駆け足で始まったのである。これまで、この事に言及した著作を見たことがない。今回、この大きな変化が何故急速に広がり得たのかと言う疑問に着目し、その答えとして3世紀に馬という新しい輸送手段を伴った民族（騎馬民族）が来たと言う仮説を立てた。そして、考古学的事象と魏志倭人伝を始めとする文献を基に7つの検証を行い、この仮説が起こり得るのか、歴史上の出来事が説明出来得るのかと言うスタンスで取組んだ。その結果、下記の3つの結論を得る共に、この時代の考古学的事象や文献資料上の多くの謎が解けた。

（補足）戦後すぐ江上波夫氏が唱えた騎馬民族説は巨大な前方後円墳や多数の馬具が出現する4世紀末～5世紀の変化を、騎馬民族が来たためであるとしたが、この説はこの時代の変化が3世紀の延長に過ぎないと言うことに反証できなかった。

～2. 結論

- ① 邪馬臺国を含む女王国は熊本中部以北の北部九州に存在し、一方で狗奴国は熊本中部以南に存在した。（9ページ参照）
- ② 纏向遺跡は朝鮮半島を南下した騎馬民族である扶余族と彼らに担がれた公孫氏が造ったものである。
- ③ 魏志倭人伝は邪馬臺国への扶余族の来襲を一旦は撃退したものの、終には制圧されてしまうまでの過程を書き留めたものである。

3つの結論を総合すると、日本と言う国家が何故7世紀末に誕生したのかがはっきりしてくる。上記の結論から得られた日本誕生までの粗筋を次に記載する。荒唐無稽とも思えるこのストーリーは全て裏付けのある事をベースとしている。

～3. 3つの結論から得られた日本誕生までのあらすじ

2世紀末、中国では道教の一派である太平道の教祖張角が起こした黄巾の乱により後漢の衰退が一挙に進み、魏・呉・蜀による三国時代に入ろうとしていた。そんな戦乱の時代、扶余族の騎馬軍団は東北アジアを舞台に荒しまわっていた。しかし、167年、遼東太守で中国東北部を実効支配していた公孫氏によって制圧、懐柔されて婚姻関係を結ぶまでになった。そして、彼らの一部は公孫氏に促される形で朝鮮半島を南下し、徐福伝承を信じ、そのまま倭国を目指した。

北部九州に上陸を試みたが、そこには豊富な鉄器を持つ倭の国々があって卑弥呼を共立して立ち向い彼らは撃退された。北部九州上陸を諦めた彼等は瀬戸内海を東に進み吉備に上陸し、そこに楯築遺跡を造った。しかし、そこでは北に位置する出雲との諍いが絶えず婚姻関係まで結んだが、融和策は実らず彼らは更に東に向かった。そして、奈良盆地に入り纏向の地に定住した。鉄器を持たない近隣の唐子・鍵や池上・曾根遺跡の勢力の抵抗は少なく、易々と制圧し、彼らはその地で自らの勢力を貯えた。そして九州に立ち返り朝鮮半島からの鉄のルートを求めて、博多湾岸の奴国（比恵・那珂遺跡）を占領し、半島貿易の足がかりにすると共に北部九州の倭の国々を攻める拠点とした。

景初2年(238年)窮した卑弥呼は難升米を使節として帯方郡に送り、当時、燕王を名乗っていた公孫氏に助けを求めた。しかし、その頃、蜀の諸葛亮の死で勢いを増した魏は司馬懿に公孫氏征討を命じ一族は滅亡寸前にあった。同年6月、難升米は公孫氏に見切りをつけ着任早々の帯方郡太守に赴き、導かれ魏の都洛陽に向った。敵(公孫氏)の背後から突然現れた卑弥呼の使いに魏の明帝は大いに喜び、破格の待遇をして直接認書し印綬を賜ると共に倭王の地位を与えた。その後、数年に渡って使節のやり取りがあり、魏と女王国との密接な関係は続いた。

一方で景初2年8月公孫氏は司馬懿によって滅ぼされ、前王の公孫恭だけが許され生き残った。彼は海を渡り、扶余族を頼って纏向に落延び、担がれて纏向の王となった。数年後、鉄のルートを断たれた女王国の弱体化が進む中、公孫恭は卑弥呼に倭王の地位を求めた。更に、予てより女王国と不仲であった狗奴国に金メッキの呉鏡を贈り、南から攻めさせた。

かつて朝貢した相手からの要求と南北挟み撃ちに卑弥呼はいよいよ窮し、魏に再度救いを求めた。正始8年(248年)魏は張政に錦の御旗を持たせ、支援に向かわせた。しかし、張政が倭国に着いた時、卑弥呼はすでに死に、倭国は扶余族に制圧されていた。

扶余族は卑弥呼のために大きな(百余歩)家ちやうを造り、彼等の風習に従い多くの奴婢(百余人)による殉葬で弔った。更に公孫恭が卑弥呼に代わって倭王の地位に就こうとした。しかし、女王国の国々はその事に激しく抵抗し、多くの(千余人)死者が出た。そこで公孫恭は卑弥呼の縁者である13歳の臺与を女王に仕立て国々を鎮めた。その時、女王国は纏向王朝の傀儡となった。臺与は怒れる張政に20人の使者と30人の奴隷や貢物を持たせ魏に送り返した。張政は事の顛末を報告せず倭国は戦乱が終わり、今後とも魏に忠誠を尽くすはずだとのみ伝えた。しかし、その後、倭国と魏との交流は途絶えてしまう。

倭国が中国に再び朝貢するのは魏が滅び晋となった266年である。その時、公孫氏は臺与と共に爵位を得て正式に倭王となった。ヤマト朝廷の誕生である。

ヤマト朝廷は倭王としての地位を確実な物とするため、邪馬臺国の名称を奪うと共にその風習を全て見倣った。卑弥呼を祖先神『天照大神』として崇め、祭祀の道具として鏡を使い銅鐸は破棄させた。列島支配を推し進め、環濠集落を止めさせ各地に前方後円墳を造った。連れて来た呉の鏡師・陳氏に三角縁神獸鏡を作らせ、それを各地の有力者に下賜し権威を示した。領土拡大には馬を利用して遠隔地まで行った。倭人は初めて見る馬に驚き、馬上から見下ろす武人を神として恐れおののき服従した。そして同時に朝鮮半島への回帰を進め、金官伽耶と百済の国造りに励み、4世紀末には高句麗と対峙し中国王朝に朝鮮半島の覇権を求めるまでになった。

転機は663年の白村江の大敗北後にやって来た。ヤマト朝廷は朝鮮半島からの完全撤退に追い込まれた。軸足を列島に移すため、記紀では半島からの出自を悉く消し国名を日本とした。天孫降臨の地として霧島で最も神々しい山、高千穂峯を選び、その北の最も高い山に韓国岳からくにだけ(本来は加羅国岳)の名をつけ出自の痕跡とした。そして、日向から九州東海岸を北上し、扶余族が北部九州来襲後に辿った岡田宮から吉備を経て纏向に至るまでの行程を神武東征とした。

～4. 7つの検証

仮説を証明するに当たって、次の7つの検証を行った

検証1. 魏志倭人伝の信憑性について

- 検証2. 邪馬台国は近畿か九州か？
- 検証3. 狗奴国とはどのような国だったのか？
- 検証4. 女王の国々と狗奴国は地図上にどのように配置できるか
- 検証5. 纏向遺跡は誰が造ったのか
- 検証6. 魏志倭人伝の新しい解釈
- 検証7. 新騎馬民族説の妥当性

【検証1】魏志倭人伝の信憑性について

邪馬台国は魏志倭人伝に記載された国である以上、その検証はこの書物に基づかねばならない。しかし、一方で当時の中国では倭人を蛮族として見ており、その内容は不確なもので、信用出来ないとの見解もある。だが、下記の①～③で述べるように、動植物や風習は正確に描写されており、一部に誇張や隠蔽、不作為による間違いあるものの、総じて信頼できる文献であると判断出来る。

- ① 植生として『くす、とち、ぼけ、くぬぎ、すぎ、かし、やまぐわ、かえで、ささ、やたけ、かずらだけ、しょうが、たちばな、山椒、みょうが』などの表記があり、全て現在の九州でも見られるものである。
- ② 動物として『牛、馬、虎、豹、カササギがいない』とあるが、全て当時の日本にはいなかった動物である。特に朝鮮半島に多数いるカササギがいないことは、日常普通に見ることの出来る大陸からの使者にとって驚きであったと思われる。朝鮮半島でカラスをなかなか見ることが出来ないことに驚く日本人と同じである。
- ③ 『弓を下に短く、上に長くもつ』は現代の弓道でも同じであり、弓のほぼ中央部を握る大陸との違いを観察したものである。



図1 カササギ

【検証2】 邪馬台国は近畿か九州か？

近畿か九州かを決定するに当たって、2つの地域が同じ共同体であったのかどうか、つまり同一の国と言えるかどうかと言う観点と、どちらがより魏志倭人伝の記載内容に近いと言う2つの観点で検討した。その結果、近畿と九州は別々の共同体であり、また、九州の方が魏志倭人伝との一致点が多かった。これらのことから邪馬台国を含む女王国は北部九州であり、纏向は全く別の遺跡であったと言う結論を得た。

(2～1) 近畿と九州は同じ共同体と言えるか

邪馬台国の勢力範囲を当時の文化的要素である下記の3つの観点から見た結果、九州と近畿は全く別々の共同体であり、結果として多くの専門家が女王国の一部と認める伊都国や奴国等が九州である限り、近畿説はこの点で矛盾すると言う結論を得た。

- ① 一般的によく言われていることであるが、図2に示すように混在箇所はあるものの銅剣・銅鉾・銅戈は北部九州を中心に広がり、銅鐸は中国・四国・近畿・東海とその広がり方は明確に分かれている。

- ② 図3に示すように邪馬台国の時代とラップする纏向の初期段階では東海を初めとする各地から外来系土器が出ている。しかし、九州の土器はなく、出ていたとしてもごくわずかであることから北部九州にあった伊都国や奴国と交流があったとは思われない。このことは唐古・鍵遺跡の土器でも同様である。
- ③ 弥生時代の九州から出土する漢鏡は、ほとんどが方格規矩鏡や連弧文鏡や内向花文鏡である。一方、近畿から出る銅鏡は非常に数が少ないが、3世紀以降、前方後円墳から出る多量の三角縁神獣鏡を始めとして、近畿から出る銅鏡は呉を起源とする神獣鏡がメインである。

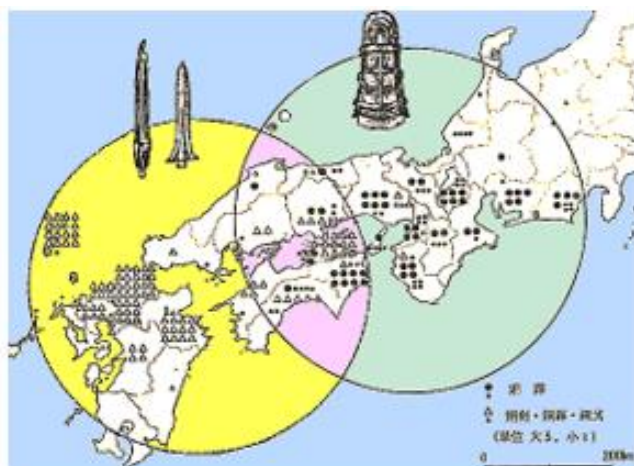


図2 銅剣・銅鉾・銅戈文化と銅鐸文化
(井上光貞著『日本の歴史1 神話から歴史へ』より)

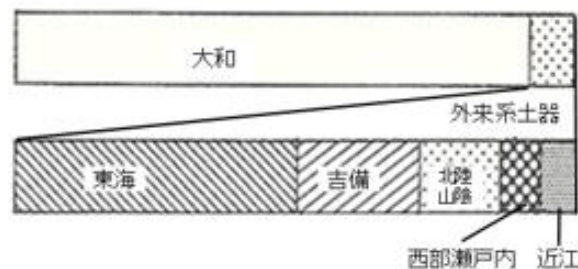


図3 纏向初期段階での外来系土器の比率
(石野博信著『邪馬台国の考古学』より纏向1式の土器のみを抽出)

(2～2) 魏志倭人伝の記載内容との一致点の比較

北部九州の遺跡と近畿の纏向を中心とした遺跡の考古学的事象をそれぞれ魏志倭人伝の記載内容に照らし合わせると、纏向を含む近畿の遺跡は一致点が少なく、一方で北部九州の遺跡郡は多くの一致点を見出す。銅鏡については、製作場所と出土場所や時代が大きく異なるため、決め手とならず、本項では除外した。三角縁神獣鏡については検証(5～4)で詳述する。

① (邪馬台国が存在した時代にそれぞれの遺跡は存在したか)

魏志倭人伝や後漢書などから邪馬台国は2世紀初頭から3世紀半ばまで継続的に存在したことが条件である。この事に対し纏向遺跡は3世紀半ばに突然出現したものであり、単独では候補から外れる。近隣の唐子・鍵や池上・曾根などの弥生遺跡は3世紀半ばまで継続的に存在し、時代的には纏向に繋がる。しかし、これらの遺跡からは鉄器や銅鏡の出土が見られず、唐古・鍵からは唯一翡翠を入れた褐鉄鉢の容器が出ているが鉄器とは言えない。また朝鮮半島製の土器もなく大陸との関係は北部九州と比べて極めて希薄であると言える。これらの事から纏向近隣の弥生遺跡は邪馬台国としての資格がない。また纏向遺跡は近隣の弥生遺跡と重なる時期があるものの、前方後円墳と言う全く異なる墳墓形式を持ち、多数の鉄器や銅鏡が出ている。従って両者は全く異質の遺跡であり、近隣の遺跡から纏向に移動があったとは認められない。よって2世紀初頭から3世紀半ばまで継続して存在した遺跡が近畿には無いことになる。

一方で北部九州の大規模弥生集落には紀元前から3世紀まで継続した多数の遺跡があり、平原遺跡を始め王墓に相応しい墳墓も複数存在する。3世紀初頭まで朝鮮半島製の土器も多く出土し、大陸との関係も深く、邪馬台国の要件を満たす。

② (伊都国または奴国からの邪馬台国の方向)

旅程などの記載から邪馬台国は伊都国や奴国から概ね南になければならない。その点、九州説では矛盾はないが、前書きで述べたように近畿説では南を東に置き換えており疑問が残る。

③ (旅程から求める位置)

多くの専門家、歴史愛好家が魏の使節が辿った旅程から邪馬台国の位置を見出そうとしたが、様々な説が生まれ、どのようにでも解釈可能であり判断材料にならない。筆者も何度も試みてみたが、旅程から邪馬臺国の場所を特定出来なかった。

④ (帯方郡からの距離で求める位置)

倭人伝の『1里』は場所が確定している帯方郡から伊都国までの国々の位置関係から約80mの短里説が正しい。そこから算出すると12000余里は960Kmとなり、伊都国までの累計を差引くと残り120Kmになり、九州内に留まる。

⑤ (記載された国数)

5世紀の倭王武の上表文には東に55国。西に66国とあり、近畿説で30国だと少な過ぎる。

⑥ (30の国々の配置)

纏向遺跡には南に位置する21国や投馬国、狗奴国、更に海を渡った東にある倭人の国など周辺の国々を合理的に配置する事が難しい。一方で、九州では9ページに示すように魏志倭人伝に記載された国々を合理的に配置する事が出来る。東にある倭人の国は本州の事を指す。

⑦ (伊都国の重要性)

近畿説では諸国を監察し、重要な機能を持っていた伊都国が西端となり、あまりにも遠隔地である。更に近畿までの間に国が存在せず不自然である。

⑧ (戸数)

人口学では弥生時代の畿内は3万人、北部九州は4万人と推測している(鬼頭 宏氏)。所が、魏志倭人にある邪馬臺国の戸数7万戸では1戸5人とすると35万人の人口となり明らかに誇張されたものである事が分かる。従って判断材料にならない。

⑨ (鉄・絹の存在)

倭人伝の中には鉄や絹の記載がある。しかし、図4に示すように弥生終末期の奈良から鉄の出土はない。一方、筑紫平野から熊本北部にかけての多くの弥生遺跡からは多数の鉄器が出土し、絹も見つかっている。

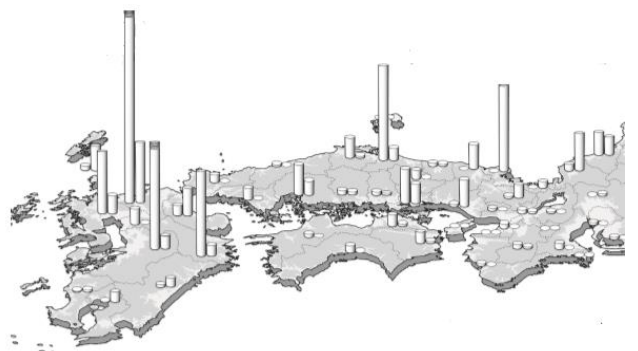


図4 弥生時代後期中葉～終末期の鉄器出土量
(広島大学 野島永著 『弥生・古墳時代の鉄器文化』より)

⑩ (水銀の存在)

近畿では多数の水銀を産していた。一方で九州では水銀を産していないが、鉱脈となる中央構造線が九州、四国、奈良を貫いており、かつては採取可能だったはずである。

⑪ (埋葬形式)

『棺有りて槨無し』とある。唐古・鍵遺跡は棺のみで槨はないが、ホケノ山古墳を始め、纏向の墳墓には槨がある。

⑫ (墳墓の大きさ)

魏志倭人伝には百という数字が6度も出てくる。それは、百歳(モモトセ)は長寿や長い年月を意味するように、百は単に大きいとか多いを意味するからである。『ひふみよ』と発する日本の数え方には10より大きい数は明確には存在しない。卑弥呼の墓の場合、百余歩は倭人が中国の使者に話したものであり、単に大きいことを意味する。従って、大きさでは卑弥呼の墓を特定できない。また箸墓の場合、前方後円墳の特異な形状に触れず、大きさを長さでなく後円部の径で表すのは不自然である。

⑬ (宮殿・楼観・城柵)

唐古・鍵や池上・曾根遺跡、纏向など近畿の宮殿、楼閣と見られる物はあるものの城柵はない。一方、吉野ヶ里には宮殿、楼閣が見られ城柵がある。

⑭ (国の周囲)

『周旋五千余里可り』とある。短里で400km程になり、後述する女王国のエリアに相当する。近畿説だと周囲は2000kmを超える。近畿までの距離との考えもあるが疑問が残る。

①から⑭までの検証をまとめると表1のようになり、九州説が圧倒的に有利である。九州説では確定しているものが多数あるが、近畿説で確定しているのは水銀だけである。

① 時代; 2世紀初頭~3世紀中頃に継続的に存在	近畿説 ×	九州説 ○
② 方向; 伊都国または奴国からの方向	近畿説 △	九州説 ○
③ 位置; 魏の使節の旅程から推測	近畿説 —	九州説 —
④ 位置; 帯方郡の距離12000里から推測	近畿説 ×	九州説 ○
⑤ 国の数30	近畿説 ×	九州説 ○
⑥ 30の国々の配置	近畿説 ×	九州説 ○
⑦ 伊都国の重要性	近畿説 ×	九州説 ○
⑧ 戸数(数字を誇張している可能性大)	近畿説 —	九州説 —
⑨ 鉄・絹の存在	近畿説 ×	九州説 ○
⑩ 丹(水銀)	近畿説 ○	九州説 △
⑪ 埋葬形式(槨がない)	近畿説 △	九州説 ○
⑫ 墳墓の大きさ(数字の信憑性疑問)	近畿説 —	九州説 —
⑬ 宮殿・楼観・城柵	近畿説 △	九州説 ○
⑭ 国の周囲(5000里; 400km)	近畿説 △	九州説 ○

表1 近畿説 対 九州説 優劣比較

【検証3】狗奴国とはどのような国だったのか?

邪馬台国を知る手掛かりの一つが南に位置する狗奴国であり、それがどのような国であったのかを知るため魏志倭人伝の次の部分を深掘りしてみた。

・・・次に奴国がありて、此れ女王の境界の尽くる所なり。『其の南に狗奴国有りて、男王と為し、其の官に狗古智卑狗有り、女王に属さず。郡より女王国(の境界)に至る萬二千余里。 男子

は大小と無く、皆鯨面文身す。古より以来、其の使中国に詣るや、皆自ら太夫と称す。夏后小康の子、会稽に封ぜられ、断髪文身して、以て蛟龍の害を避けしむ。今、倭の水人、好んで沈没して魚蛤を捕え、文身し亦た以て大魚・水禽を厭わしむるに後、ようやく以て飾と為す。諸国の文身各おの異り、或いは左にし或いは右にし、或いは大にし或いは小にし、尊卑差有り。其の道理を計るに、当に会稽の東冶の東に在るべし。』 其の風俗淫ならず。男子は皆露ケイし、・・・。

この文章で水野祐氏は『郡より女王国に至る萬二千余里』は文脈上、女王国の後に“の境界”が抜けたもので、萬二千余里は帯方郡から女王国と狗奴国との国境の事を指し、これ以降の文章は全て狗奴国の事であると主張している。しかし、森浩一氏は著書『語っておきたい古代史』の中で半分そう思えるが、それだとおかしい所も出てくると述べている。どこかで狗奴国の説明が終わっているはずであり、それがどこであるか探してみた。

その視点で読み直すと、『其の道理』は『萬二千余里』に対応しており、『その距離 12,000 里から推測して、当に会稽の東冶の東にあるべし』と言う意味になる。従って、狗奴国の説明後、場所を特定して文章を括り『其の南・・・東冶の東に在るべし』の範疇が狗奴国の説明ではないかと思えてくる。

また、『萬二千余里』の後の文章は何も付けずに風俗の説明に入るため、この説明は狗奴国のこととなるが、『』に続く文章は、わざわざ其の風俗をつけて風俗の説明に入っている。この其のは女王国を指し、これから女王国の風俗の説明に入る事を意味しているように思われる。

このように考えると、補強材料が出てくる。この考えだと鯨面（入れ墨）は狗奴国の風習となるが、後述で『朱丹を以て其の身体に塗ること、中国が粉を用うるが如きなり』とあることから女王国では体を赤く塗っていた事が分かる。『入れ墨』と『身体を赤く塗る』事はそれぞれ別の国の異なる風習と解釈することで、入れ墨の上に朱を塗ると言う矛盾の説明が出来る。

これらの事から『』内が全て狗奴国の説明となり、次のような事が言える。

- ① 入れ墨は縄文時代の土偶に多く見られる事から、狗奴国は縄文色の強い国であり、女王国は中国からの弥生渡来人の国になる。
- ② 入れ墨の風習は古墳時代の埴輪にも見られるが、下層階級の埴輪のみである（設楽博己氏）。これはこの時代までは縄文から続く風習を持った倭人と弥生時代以降やって来た渡来人との民族的平準化が進んでいなかったためだと解釈できる。日本書紀の神武天皇紀にある伊須気余理比売が求婚使者としてやって来た大久米命の入れ墨を見て驚いた話しや、履中天皇が入れ墨を止めさせた話とも符合する。
- ③ 『其の使中国に詣るや』とあるように、狗奴国は朝貢国であった（時期的に見て相手は公孫氏の可能性が高い）。中国王朝は朝貢国以外の王は認めていない。朝貢国だからこそ、魏は狗奴国の王名、『卑弥弓呼』を知っていて倭人伝に記載した。
- ④ 狗奴国と邪馬臺国は長年に渡って互いに反目はしていたが、朝貢国同士のため大きな戦いをした訳ではない。倭人伝にも両国の争いで死者が出たような記載は無い。
- ⑤ 『会稽の東冶の東』の会稽の東冶は諸説あるが、郡より萬二千余里（約 960km）から言って、現在の長江河口に辺りになる。南部九州はその東に当たる。

【検証4】 女王の国々と狗奴国は地図上にどのように配置できるか

(4～1) 魏志倭人伝から読み解く女王の国々と狗奴国の位置関係

伊都国から邪馬臺国への旅程『水行10日陸行1月』は様々な人が、様々な解釈をしているが、未だに決着していない。旅程からの邪馬臺国の位置特定は不可能と言える。しかし、旅程以外でも場所が示唆されており、女王国の国々と狗奴国を地図上に配置することが出来る。

- ① 位置や戸数が示された7国の中で末慮国、伊都国、奴国、そして恐らく不弥国も、佐賀から福岡北部の玄界灘沿いにあり、邪馬臺国はその南側にあった。
- ② 位置や戸数が示された国を女王国の北としていることから、遠望で詳らかにできない『その余の旁国』である21の国々は南側になる。そして遠望で詳らかにできないと言う事から邪馬臺国と21国の間には山が連なっており、障害になっていたことが窺える。
- ③ 21国とその南の狗奴国の境界までが帯方郡から12,000余里であり、伊都国までの累計を差し引けば、伊都国からは残り1500里、約120kmとなる。

(4～2) 女王国と狗奴国の地図上の配置

上記の位置関係と女王国と狗奴国の違いを前提に、その境界が九州のどこかを考えると、有力候補は熊本の中央を流れる緑川が当てはまる。伊都国から120kmとも一致する。緑川以北が女王国、以南が狗奴国となる。

- A) 熊本平野北部から阿蘇にかけては方保田・東原遺跡など多数の鉄器を有する大規模な弥生遺跡がいくつも存在し21国に比定する事が出来る。
- B) 同じ熊本でも緑川以南では大規模な弥生遺跡は存在せず、弥生時代には珍しい入れ墨をした土偶が出土し、緑川以北とは全く様相が異なる。
- C) 狗奴国の中心としては人吉盆地が候補に上げられる。ここでは弥生式土器で最も美しいと言われる免田式土器が出ているが、この土器にある重弧文は縄文時代からの流れをくむものであり、この地域が縄文色の強かった事が窺える。
- D) 同じ人吉盆地にあるあさぎり町の才園古墳から出た呉鏡と思われる金メッキを施したりゅう金獣帯鏡は、扶余族が邪馬臺国を北から攻める際、南から挟み撃ちするための報償として公孫氏が狗奴国に与えたものと推察できる。
- E) 邪馬臺国を筑紫平野に設定すると、南側には断層をなした耳納山脈が壁のように立ちはだかり、そのまた南側はいくつもの山並が熊本北部まで続いていて『遠望で詳らかに出来ない』ことを想定できる。
- F) 投馬国は南部九州で唯一多数の鉄器が出る宮崎の川床遺跡周辺が一番相応しい。その近在には『妻』や『都萬』の地名があり、『つまこ



図5 女王国と狗奴国(点線の範囲が女王国)

く』とも呼べる投馬国と通じる。後の西都原古墳群の近傍であり、伊都国から海路で 400km はあり、水行 20 日はかかる。

以上の事から女王国の国々と狗奴国を地図上に配置すると図 5 のようになる。

【検証 5】 纏向遺跡は誰が造ったのか？

(5～1) 邪馬臺国が東征したのか？

次の理由で纏向遺跡が 3 世紀のものだと言うことを前提とした場合、邪馬臺国の東征は無かったと判断できる。

- ① 倭人伝では邪馬臺国は長年狗奴国と対峙していたとあり、移動したと言う一大事が記載されていない。従って、少なくとも文献上は卑弥呼の時代までは東征はなかったことになる。
- ② 纏向が 3 世紀の遺跡であれば卑弥呼の時代には、すでに存在していたことになる。であればこの遺跡は東征の結果出来たのではなく、元々あった物を邪馬台国が征圧したと言うストーリーが必要となる。その為、一般的に九州説では纏向は 4 世紀の遺跡だとする。
- ③ 北部九州の墳墓形式が纏向に引継がれた形跡がなく、纏向の初期型前方後円墳や木槨墓は吉備にその原点を見出す。この事は支配者層が九州ではなく、吉備から移動して来た事を意味する。
- ④ 纏向遺跡からは九州の土器が出ていない。この事は九州からの民の移動は無かった事を意味する。
- ⑤ 鉄の供給元であった朝鮮半島から遠く、当時、後進地域であった奈良盆地に移動しなければならない動機が存在しない。
- ⑥ 北部九州から出るのは内行花文鏡や方格規矩鏡が主であるのに対し、近畿から出る銅鏡は三角縁神獸鏡を始めとして神獸鏡がメインである。

(5～2) 纏向遺跡は誰が造ったのかの条件

纏向遺跡を誰が造ったかについては下記に示すこの遺跡の特徴と、3 世紀の大きな変化が急速に日本列島各地に広まり、4 世紀には倭国が朝鮮半島にまで展開出来るようになったと言うことを説明できなければならない。

- ① 纏向遺跡は 3 世紀中頃、突然出来たものであり、都市計画に基づく住居跡の無い政治色の強い大規模遺跡である。
- ② それまでの近畿には無かった大陸色の強い鉄器や呉鏡を含む漢鏡、呉鏡をベースとしたと思われる三角縁神獸鏡などが出ている。
- ③ 図 6 で示すように、纏向で発生した前方後円墳と言う全く新たな墳墓が南は鹿児島から北は福島の内陸まで日本各地に短期間に広まった。それは図 2 で示した銅鐸文化圏や銅剣・銅鉾文化圏を遙かに凌ぎ、新たな権力者の威光がそれまでにない広い範囲に届いた事を示す。
- ④ 3 世紀末までに各地の環濠集落が急速に消滅した。

- ⑤ 銅鐸が廃棄され、祭祀の方法が銅鏡を中心にしたものになった。
- ⑥ 近畿への鉄の流入や、相互の土器の発掘から見て朝鮮半島との関係がそれまでの北部九州から近畿に変わった。
- ⑦ 3世紀を過ぎると、纏向遺跡の興隆と時を同じくして、吉野ヶ里や奴国の王がいたとされる春日市の須玖・岡本遺跡が衰退を始める。それに対し、博多湾に近い比恵・那珂遺跡が興隆し都市計画に基づく道路跡が見つかると共に朝鮮半島との交流も盛んになる。
- ⑧ 4世紀後半、国造りして間もないヤマト朝廷が朝鮮半島に進出し、高句麗と対峙するまでになる。

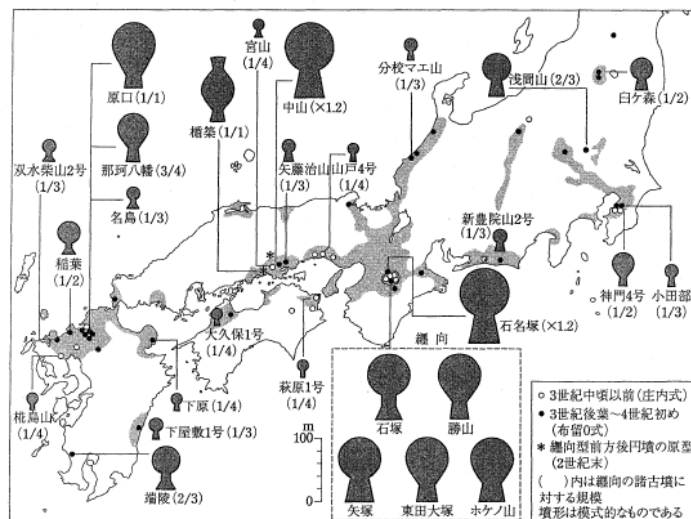


図6 纏向型前方後円墳の分布(寺沢薫氏 2000)

(5～3) 新たな輸送手段、馬の利用

前項で述べたように纏向型前方後円墳の築造や環濠集落の消滅が列島各地に急速に展開したことは、それまで北部九州内の女王国や山陰のみの出雲、さらに吉備などに比べて格段の拡がりである。このことは**新たな支配者の侵入と新たな輸送手段(馬)**なしには考えられない。

本項では3世紀に日本列島に馬を伴った一族が来た可能性について言及してみる。

- ① 中国では、中原に発生した夏や殷が馬車の発明によって広い範囲を支配するようになった。そして始皇帝は騎兵を使う事で一段と広い範囲の支配を可能にした。更に漢の初代皇帝、劉邦は北方騎馬民族を取り込んで馬車が主体の楚軍に勝利し、続いて武帝は40万の騎馬軍団で匈奴を北方に退け、遠くタクラマカンの西にまで漢帝国の領土を広げた。このように**騎馬は領土拡大のための重要な手段**だった。当時、馬具は無く、裸馬に乗ることは特殊技能であり、自在に馬を操れるのは北方騎馬民族に限られていた。中国での騎馬による活発な動きが3世紀の日本列島にやってくるのは必然的と言える
- ② 当時、列島内に道路網はなく、食料を背負って藪を払う獣道を行くような歩行では1日数キロがせいぜいである。まして長期に渡る遠征は不可能である。馬を伴えば、食料運搬は格段に向上し行動半径は一気に広がる。沼や山河の多い日本では馬車より騎馬の方が優れている。
- ③ 福岡県の弥生後期の大原(小葎)遺跡からは明らかに馬と思われる線刻画のある土器が見つっている。更に箸墓古墳で見つかった木製の鐙は3世紀末の可能性があり、使用された形跡も残っている。3世紀の馬の存在はすでに立証されているのかも知れない。箸墓が出来た時代に騎馬の習慣を持った人物がいた可能性は非常に高いと言える。しかし、現時点で定説となっておらず、**3世紀での馬の存在はミッシングリンク**である。

- ④ ミッシングリンクとなった最大の理由は頭数が少なく遺骸が見つかりにくい事と、主要な騎乗用馬具の発明が4世紀だったと言う事にある。無かった物は見つからない。
- ⑤ 馬の繁殖、飼育、調教、更に騎乗には高い技術力を要する。3世紀時点では、それらが出来る人間は列島内におらず、馬はその都度、小さな船で朝鮮半島から運んで来たはずだ。しかし、少ないとは言え、すでに馬の飼育が各地で行われている中、4世紀に馬具が発明され列島に伝わると騎乗の習慣は瞬く間に各地に広がった。5世紀初め、馬の飼育が列島各地でほぼ同時に見られるようになった現象も、この事によって説明出来る。
- ⑥ 当時、日本列島にすむ最大の動物は鹿や月の輪熊である。それに対し、図7で示すように小型とは言え渡来馬（現在の日本在来馬）は大きさ、体重でこれらの動物に勝り、最大の動物となった。この気の荒い動物に跨がり、自在に操る事の出来る人間に対し、倭人は畏敬の念を抱き、神のごとく思ったはずである。この事が、ごく少数の渡来人による支配を容易にしたと考える。



図7 渡来馬と弥生人・動物の大きさの比較

(5～4) 纏向遺跡を造ったのは誰か？

前項での騎馬民族到来の可能性と、次の①～⑨の理由で纏向遺跡は扶余族と彼らが担いだ公孫氏によって造られた可能性が高いと判断できる。

- ① 纏向型前方後円墳は木槨墓や特殊器台などから吉備の楯築墳丘墓にその源流を見出す。
- ② 楯築墳丘墓は2世紀末の弥生時代では突出した規模の長さ80mの墳墓で全く新しい形状の双方中円墳である。木槨墓や大量の水銀朱や鉄剣など大陸の影響が強い(福元明氏)が、それ以前の吉備では大陸の影響は少なく、倭人に木槨墓の複雑な構造を知る手段は無かったはずである。また倭人がこれ程の規模の墳墓を作り威信を示す理由は何だったのか疑問が残る。これらの事から、この遺跡は在来の倭人ではなく、大陸からの新たな侵入者が造ったと考えるべきである。
- ③ 考古学者がこの墳墓を倭人が造ったと考える理由は、この墳墓から出た特殊器台が、それまでの吉備地方の器台が変化したものである事を根拠としている。しかし、そもそも特殊器台は何故生まれたのかを考えてみると異なる見解が可能となる。



図8 楯築墳丘墓

(岡山市埋蔵文化財センター定期講座 平成20年10月18日資料より)

特殊器台は埴輪の起源だと言われている。一方、埴輪の起源については日本書紀に垂仁天皇の時、殉葬での生贄いけにえの代わりに作ったとあり、特殊器台も同様であったと考える事が出来る。

- ④ 魏志扶余伝には殉葬の習慣が載っている。数に劣り、出雲とも対峙しなければならない扶余族が地元民の懐柔のため、生贄に代って、それまでの器台を変化させ葬送儀礼用に大型化したと推察出来る。楯築墳丘墓は本来殉葬を伴う木槨墓だったと言うことになる。

- ⑤ 殉葬を伴う木槨墓は金官伽耶と思われる3世紀の釜山近くの大成洞遺跡にある。韓国の申敬澈氏は、この殉葬を伴う木槨墓は扶余族によって造られたと主張している。
 (補足) 楯築遺跡は2世紀末と考えられ、大成洞遺跡が出来た3世紀中頃より早い時期に造られているため、金官伽耶より先に扶余族は日本で活動を始めた事になる。
- ⑥ 後漢書には『安帝の永初五年(111年)、扶余王が初めて歩兵と騎兵七、八千人で楽浪郡に侵攻し・・・』とあり、扶余族が騎馬民族であったことは間違いない。当時馬具は発明されておらず彼等は裸馬に乗っていたと考えられる。
- ⑦ 出雲市の四隅突出型墳丘墓の西谷3号墓は楯築遺跡と同様の木槨墓であり、特殊器台も出ていることなどから、楯築遺跡被葬者と関連があり、婚姻関係も考えられる(寺沢薫氏)。青谷上寺遺跡の女性を含む殺傷痕のある多数の人骨と併せて考えると、楯築遺跡を作った扶余族が出雲との和解策のため、婚姻関係を結んだが上手くいかず、出雲に赴いた一族は惨たらしいやり方で殺戮されたと思われる。
- ⑧ 都市計画に基づく構築は都市建設の経験のない扶余族だけでは困難であり、公孫氏の関与が必要であったはずだ。
- ⑨ 東大寺山古墳から出た中平年号の入った鉄剣は金象眼がなされており、金純度の高さから中国製であると推定され、当時かなりの貴重品であったと考えられる。公孫氏が後漢王朝から下賜されたものを、身の証として日本に携えてきたと考える(一般的に東大寺山古墳は和邇氏の古墳と言われているが、その副葬品の多彩さからかなりの有力者の墓であり、大王に近い人物の墓であったと思われる)。

⑩ 三角縁神獸鏡はどのようにして発生したか

初期の三角縁神獸鏡には製作者と思われる呉の鏡師であった陳氏の記銘がある。以下の理由で三角縁神獸鏡は陳氏が公孫氏に伴われて日本に来て作ったものであると考える。

王金林氏は、その著『弥生文化と古代中国』の中で次のように述べている。

陳氏の銅鏡は全部で28面が残っており3つに分類できる。7面が平縁の神獸鏡で、全て長江流域で出土したものであり、呉の年号である黄武7年(228年)と黄龍元年(229年)の紀年がある。残りの21面は全て三角縁神獸鏡で内7面が景初3、4年(239、240年)と正始元年(240年)の魏の年号が入っている。14面の紀年のない三角縁神獸鏡の中に『海東に至る』の銘文があり、日本で作ったと思われる。

平縁の神獸鏡と三角縁神獸鏡は製作年代に10年の空白期間があり、互いの銘文の内容は全く関連が無さそうに思える。一方で三角縁神獸鏡の銘文内容は洛陽の尚方作の銘のある方格規矩鏡の強い影響が見られる。従って、三角縁神獸鏡は呉の神獸鏡と洛陽の方格規矩鏡の両方の影響を受けていると言える。そして、その銘文の内容から陳氏は当初、呉にいたが、続く10年の空白期間は洛陽にいて魏の紀年の入った7面の鏡を作り、その直後、日本に渡って来て紀年のない三角縁神獸鏡を作ったと王氏は推測している。

しかし、この空白の期間、洛陽は魏の都であり合肥の戦いに代表されるように208~253年の間、魏と呉は激しい戦闘を繰り返していた。特に234年の五丈原の戦いは有名である。従って、この期間中に、お抱え鏡師の陳氏が呉から魏に行くことは不可能だったはずだ。一

方、帯方郡では叔父の公孫恭を脅して後を継いだ公孫淵が232年に一時的に呉の孫権の臣下になっている。魏との戦いを有利にするため、呉はりゅう金獸帯鏡などと共に陳氏を公孫氏の下に送り、この時期、陳氏は帯方郡にいたと思われる。帯方郡でも尚方作の鏡は当然、身近に見ることが出来たはずだ。次のように推察する。

238年公孫氏は魏に滅ぼされるが、公孫恭は恭順の意を表すため魏の年号、景初の入った三角縁神獸鏡を陳氏に作らせた。しかし、その鏡を魏に渡すことなく陳氏は公孫恭に伴われて日本に来たと考えることができる。実在しない景初4年の年号を作ったのも混乱の最中の帯方郡にいたため皇帝崩御を知るのが遅れたと理解できる。

三角縁神獸鏡は既に500面以上発見されている。檀原考古学研究所は昨年、この鏡は同范技法で作られ、全て同じ鑄型を改修しながら作ったものであるとの結論を出した。この方法は多量生産に向き粗製乱造されたと言える。そして、この鏡は主に4世紀の古墳から出土しており、出土状況から見て丁寧に扱われていたとは言い難い。

これらの事から三角縁神獸鏡は初期の大和朝廷が急速に展開する列島支配に向けて、各地の有力者への下賜のため大量に作った物だと言える。各地に赴いた馬上の武人の話す難解な言葉を理解できなかった倭人は自分の姿が映る不思議な物をどのように取り扱えばいいのか分からなかった。そして数十年が経ち下賜された本人が亡くなる頃になると、姿は映らなくなり有り難みも無くなってしまった。そこで、その後亡くなった人間の墓に無造作に埋めてしまったと言うことではないだろうか。

- ⑪ 植民地支配やモンゴルや満州族による漢民族の支配などで見られるように被支配民族の文化や習慣に大きな変化はない。日本の3世紀も同様であり、縄文、弥生と続いて来た日本の根底にある文化、竪穴式住居や土器などは、それ以降も連続的に繋がって行った。一方、日本人自身が変わろうとした明治維新は、庶民の生活習慣まで大きく変貌した。

【検証6】 魏志倭人伝の新しい解釈

魏志倭人伝は、扶余族と彼らに担がれた公孫氏が邪馬台国を攻撃し、征圧してしまうまでの一連の出来事を書き留めたものであると考えることが出来る。このように解釈することで、不可解であった箇所がより鮮明になり、それは～3のあらずじで述べた通りである。ここでは何故そのような解釈が出来るのかを記載する。

- ① 魏志や後漢書によると、2世紀初め、扶余族は中国東北部で荒らしまわっていたが、2世紀末に公孫氏の配下となり、その娘を娶るまでの関係になっていた。
- ② 韓と濊^{わい}が強勢になって多くの民が韓国に流入した時期と倭国大乱の時期は後漢書では共に桓帝と靈帝の間（146—189年）である。韓が韓国に流入は不自然であり、扶余伝には濊王の印の話もある事や、前述したように2世紀末の楯築墳丘墓や3世紀の大成洞遺跡が扶余族によって造られたと思われる事から韓国に流入したのは扶余族だったと考えられる。
- ③ 倭国大乱は一般的に弥生時代の国々が互いに相争った内乱とされているが、扶余族が北部九州を襲った事であると置き換える事が出来る。当時、狗邪韓国は倭国の一部と認識されており、そこからの来襲であれば内乱と言える。また卑弥呼が使いを送った時点では、すでに扶余族は纏向と博多湾岸を征服していたため正に内乱である。

- ④ 国々が半独立状態で相争う内乱であれば、それぞれが強いリーダーシップの下、決着がつくまで戦い続けるはずであり、そこに女性が入り込む余地はない。卑弥呼共立の理由は外敵に当たるためであったと考えると自然である。
- ⑤ 一般的に、卑弥呼の使いは景初2年（238年）6月ではなく、公孫氏滅亡後の景初3年の間違いだと言われている。しかし明帝崩御は239年1月であり、次皇帝の曹芳は8歳の幼帝であったため、直接、認書を発することは不可能である。また公孫氏が滅んだ238年8月の混乱の最中に情報を得て10ヶ月で使いを送り返し洛陽まで行くことは不可能である。従って238年で正しい。いずれにしても、このようなベストタイミングで卑弥呼が魏に使いを送れたのは予め公孫氏の所に卑弥呼の使いが到着していたからこそ可能になったと考える。
- ⑥ 卑弥呼が死んだ時『卑弥呼以て死し、多いに冢を作るに、径百余歩、殉葬する者は、奴婢百余人。』とある。しかし、弥生時代の日本に殉葬の習慣は見つかっていない。また、倭人伝には葬儀のやり方を『其の死するや棺有りて槨無く、土を封りて冢を作る。始め死するや喪を停むること十余日、時に当りて肉を食らわず、喪主号哭泣し、他人就きて歌舞飲酒す。已に葬れば、家を挙げて水中に詣りて澡浴し、以て練沐の如くす。』と詳述しているが殉葬の記載はない。東夷伝には扶余伝にのみ殉葬の記載があり、卑弥呼の死に伴う殉葬は、彼女が扶余族的方法で埋葬された事を示唆していると考えられる。
- ⑦ 卑弥呼の死後、公孫氏が倭王になろうとしたために女王国の国々は激しく抵抗し、千人（たくさんの意味）もの死者が出た。狗奴国との争いの最中に男王が立とうとしただけで多くの死者が出る程の戦いをするのは不可解である。
- ⑧ 狗奴国が朝貢していた相手は公孫氏であったため、公孫恭から金メッキを施したりゆう金獣帯鏡を下賜されると、その指示に従い邪馬台国を攻めた。
- ⑨ 狗奴国との戦いでは死者が出たとの記載もなく、単にいがみ合っていただけであり、激しい戦闘は起きていない。張成が『激しく告諭』したのは、扶余族に攻められている時に、朝貢国である狗奴国なんか相手にするなと叱ったのであろう。

【検証7】 新騎馬民族説の妥当性

邪馬臺国東征説と優劣比較した結果、この新騎馬民族説によって3世紀以降の纏向の急速な発展、変化がより合理的に説明出来る。当然、近畿説での説明はより困難である。

① 纏向は都市計画に基づく住居跡の無い政治色の強い大規模遺跡である

邪馬臺国東征 ⇒ △ 九州の遺跡に都市計画に基づく竪穴住居跡のない遺跡はない。奴国の比恵・那珂遺跡の一部に整備された道路跡などが見られるが、この遺跡は纏向王朝が造った可能性が高い。

新騎馬民族説 ⇒ ○ 公孫氏なら都市計画に基づいた街づくりが可能であり、扶余族や公孫氏の住居は竪穴式ではないため住居跡が見つからない。

② それまでの近畿には無かった大陸色の強い鉄器や漢鏡（呉鏡を含む）などが出ている

邪馬臺国東征 ⇒ △ 弥生時代の北部九州は大陸との結びつきが強く、多数の漢鏡を持っていた。しかし、呉との接触は少なく呉鏡や三角縁神獸鏡発生の説明が出来ない。

新騎馬民族説 ⇒ ○ 鉄器の説明はもちろん、前述したように、三角縁神獸鏡発生の説明も出来る。

- ③ 纏向で発生した前方後円墳と言う全く新たな墳墓が南は鹿児島から北は福島までの列島各地に短期間に広まり、新たな権力者の威光が、それまでにない広い範囲に届いた。

邪馬臺国東征 ⇒ × 前方後円墳は纏向で初めて発生したものであり、北部九州しか支配下になかった邪馬臺国が列島各地に急速に展開出来たとは思えない。

新騎馬民族説 ⇒ ○ 船と馬を利用して列島各地に赴いた。

- ④ 3世紀末までに各地の環濠集落が急速に消滅した。

邪馬臺国東征 ⇒ △ 北部九州の有力遺跡は、ほとんど環濠集落であり、何故急速に消滅させなければならなかったのか疑問。

新騎馬民族説 ⇒ ○ 扶余族が支配する上で環濠は邪魔であった

- ⑤ 銅鐸が廃棄され、祭祀の方法が銅鏡を中心にしたものになった。

邪馬臺国東征 ⇒ ○ 弥生時代の北部九州では鏡を中心にした祭祀を行っていた。

新騎馬民族説 ⇒ ○ 邪馬臺国制圧後、倭国支配を容易にするため、その風習に倣った。

- ⑥ 朝鮮半島との鉄の流入ルートや土器の相互交流の関係が北部九州から近畿になった。

邪馬臺国東征 ⇒ △ 鉄製武器の移動は説明がつくが、九州の一般鉄器までもが減少し、衰退している。これは朝鮮半島からの鉄のルートそのものが遮断されたことを意味する。

新騎馬民族説 ⇒ ○ 朝鮮半島と北部九州間の交流は扶余族により遮断され途絶えた。

- ⑦ 4世紀後半、国造りして間もないヤマト朝廷が朝鮮半島に進出し高句麗と対峙するまでになった。

邪馬臺国東征 ⇒ △ 東征し列島支配のみでも困難な上に更に併行して朝鮮半島まで進出するのは不可能だと思われる。

新騎馬民族説 ⇒ ○ 大陸出身の彼等は半島への執着が強く、進出も容易であった。

～5. 後書

本論では、邪馬台国の場所は筑紫平野としたものの、遺跡の特定までは出来なかった。しかし、検証を進める中で、遺跡の様相から言って吉野ヶ里の可能性が一番高いように思えるようになった。この遺跡が魏志倭人伝の記載内容が一番近いと思われる。この遺跡は卑弥呼時代にはすでに衰退していたと言うのが有力候補から脱落した理由であるが、自説では扶余族の攻撃は既に始まっており矛盾しない。一方で、卑弥呼は倭国の都から逃避していた可能性もある。そうすると邪馬台国は幻だった事になる。誇張された人口や曖昧で遠くに見せようとしていた旅程なども、その事と関連しているのかも知れない。邪馬台国への究明は尽きそうもない。

現時点3世紀の騎馬民族到来を示す証拠は、箸墓古墳における木製の鐙のみである。だが、この鐙に対する考古学会の評価は未だ定まっていない。しかし、纏向の地に馬に乗ることの出来る人間がいた可能性については誰も否定出来ないであろう。とは言っても、今回の検証では3世紀における騎馬民族の到来を十分には証明しきっているとは言えない。だが、この仮説がこの時代

における大きな変化を、どの説よりも合理的に説明し、魏志倭人伝における不可解な内容も理解できるようにしたと考えている。

これまでに触れた書物や、講演会や講座の中で、今回の仮説を肯定できる資料は多くはなかった。しかし否定出来る資料も見つからなかった。そして、検証が進むにつれ、より合理的に説明が出来る事象は増えてきた。確信は日に日に増して来たと言える。筆者は、専門家が述べる個々の事象に対し、その是非を述べるだけの博識はない。しかし、発信される多くの考古学的事象から一番合理的と思われる筋道を立てることには吝かではない。今後の考古学の発展が、この説に対する更なる補強材料を見出してくれるものと思う。

連絡先 ; tsuchida-tyke@nifty.com

参考文献（引用ではなく否定材料がなかったと言う意味で記載した書籍を含む）

- 藤田憲司『邪馬台国とヤマト王権』えにし書房 2016 年
藤尾慎一郎『弥生時代の歴史』2015 年
洋泉社編集部『邪馬台国』洋泉社 2015 年
松尾 光 現代語訳『魏志倭人伝』新人物文庫 2014 年
中尾祐太（西南大学大学院）拠点環濠集落の再検討『東アジア的視点からみた弥生時代の集落景観』2014 年
白石 太一郎『倭国の形成と展開』敬文舎 2013 年
片山 一道『骨考古学と身体史観』敬文舎 2013 年
土生田 純之『古墳』吉川弘文館 2011 年
若井敏明『邪馬臺国の滅亡』吉川弘文館 2010 年
寺沢 薫『王権誕生』講談社学術文庫 2008 年
鬼頭 宏『人口から読む古代史』講談社学術文庫 2000 年
朴 天秀『伽耶と倭』講談社選書メチエ 2007 年
福本 明『吉備の弥生大首長墓』新泉社 2007 年
篠田 謙一『日本人になった祖先たち』NHK 出版 2007 年
江上 波夫・佐原 真『騎馬民族は来た?! 来ない?!』小学館
日高 正晴『西都原古代文化を探る』鉦脈社 2003 年
安本 美典『「邪馬台国＝畿内説」「箸墓＝卑弥呼の墓説」の虚妄を衝く!』宝島社新書 2009 年
森 浩一『語っておきたい古代史』新潮文庫 2002 年
NHK「日本と朝鮮半島 2000 年」プロジェクト『日本と朝鮮半島 2000 年』NHK 出版 2010 年
菊池 秀夫『邪馬台国と狗奴国と鉄』彩流社 2010 年
藤井 游惟（ゆうい）『白村江敗戦と上代特殊仮名遣い』東京図書出版会 2007 年
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『海でつながる倭と中国』新泉社 2013 年
石野 博信『邪馬台国の考古学』吉川弘文館 2001 年
王金林『弥生文化と古代中国』学生社 1992 年
伊都国歴史博物館『海を越えたメッセージ・楽浪交流展』2004 年
伊都国歴史博物館『狗奴国浪漫 ～熊本・阿蘇の弥生文化～』2014 年
伊都国歴史博物館『玄界灘続倭人伝―末慮・伊都・奴の古墳文化』2013 年
伊都国歴史博物館『邪馬台国を支えた国々 ～今使訳所三十国～』2011 年
田原本町教育委員会『唐子・鍵遺跡』1998 年
安川 満 『特殊器台から埴輪へ』岡山市埋蔵文化財センター定期講座 2008 年
橋本 輝彦『日本における都市の初現 - 纏向遺跡の調査から』Nara Women's University Digital Information Repository 2008 年
野田 雅之『丹後国丹生の郷に古代水銀朱を追う（略報）』熊本大学学術リポジトリ 2007 年

宇垣 匡雅『吉備における古墳時代の政治構造 第4章 特殊器台型埴輪に関する若干の考察』総合研究大学院大学
2008年

野島 永『弥生時代後期から古墳時代初頭における鉄製武器を巡って』「河瀬正利先生退官記念論文集 考古論集」
2004年収録

野島 永『弥生時代における鉄器保有のの様相』第58回埋蔵文化財研究集会「弥生時代後期の社会変化」2009年
平成26年度 伊都国歴史博物館 開館10周年 特別展開催について（ご案内）